

## 音楽表現系演習科目における遠隔授業のあり方を考える

Considering the ideal way of distance learning in music expression practice classes

橘 和代 (有明教育芸術短期大学)

Kazuyo TACHIBANA (ARIAKE College of Education and the arts)

松田扶美子 (有明教育芸術短期大学)

Fumiko MATSUDA (ARIAKE College of Education and the arts)

(要旨)

2020年のコロナ禍に伴い、音楽表現系演習科目の遠隔授業の在り方を根底から見直す必要性が出てきた。特に、声を出しアイスブレイキングをふんだんに取り入れながら、アタッチメントや情緒教育を学生自らが直接体感することをねらった「演習：音楽系表現授業（保育教材研究・うたと手遊び）」において、対面授業の中止は大きな痛手であった。そこで前年度までのシラバスを土台に、遠隔授業の様々な手法を取り入れ、手探りながら授業の組み換えを行った。この実践から、新しい発想の授業形態が生まれ、学生の学びに貢献する点がいくつかあると考え、学生全員の自由記述をもとに検証を行った。結果、①反転授業の効果、②zoomの活用、③対面授業とオンラインの融合にヒントがあることが明らかとなった。また、今後の対面授業の見直しへの貢献につながった。

(キーワード)

音楽表現・遠隔授業・対面授業・反転授業

### 1. 本研究の背景、経緯

#### (1) 本学における音楽表現系演習の取組

本学では音楽表現系演習科目に力を入れており、「音楽Ⅰ（理論と基礎実技）」「保育教材研究（うたと手遊び）」「音楽Ⅱ（うたと楽器）」「ピアノⅠ」「ピアノⅡ」「総合表現」その他にも「子どもと表現」などの授業がある。演習が中心であり、今までは学年末に行われる授業発表が目標となり、授業内で様々な取り組みがなされてきた。しかし、いずれの科目とも教師間の連携が薄く、それぞれの科目が独自の特徴をもって行われつつも紋切り型であったことは否めない。

そこに加えてコロナの影響でオンライン中心の授業となり、これまでの演習形式の対面授業はほとんどできない状況であった。また、入学年度生にとっては、オリエンテーションや履修登録の説明などは全てオンラインで行われたため、学生の交流も出来ない状況での授業開始であった。教師側のデメリットとしては、音楽表現系担当者間での報告・連絡・相談などがこれ

まで以上に出来ない状況でもあった。しかし、遠隔授業をそれぞれの科目で進めていくうちに、他の教師のオンライン授業を可視化、概観できる環境になったことが功を奏してオンライン授業内容を共有できたことにより、内容の重複や補うべきところが明確化するという思いもよらない効果も浮上した。オンラインの会議では、ピアノの授業で取り扱う教材の見直しを開学以来初めて行った。効果的・効率的に、どうしたらより質の高い授業ができるかを議論しあった。新しい発想の音楽、ピアノの教育について、さらには教育・保育現場で求められる音楽教育の在り方について議論し、それぞれの科目の到達目標を理解した。

筆者らが担当する保育教材研究（うたと手遊び）も演習中心であり、90分の授業の中で講義に割く時間は15分から20分ほどであった。しかしコロナ禍において声を出す、触れ合うことができない状況となり、必然的に講義を占める時間が多くなった。

## (2) コロナによる全国大学および学生の状況

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、全国の大学、大学院を令和2年10月末までに退学、休学した学生が5,238人いることが、文部科学省の全国調査であきらかとなった。

調査(文科省,2020)は、全国の大学院、大学、短期大学、高等専門学校を対象に令和2年10月末現在で退学、休学した学生数を聞き取った。それによると、退学した学生は2万5,008人、休学した学生は6万3,463人。この数自体は前年同期の退学3万1,841人、休学7万325人を下回っていた。しかし、朝日新聞社と河合塾が実施した合同調査では、全国の大学が年度末に退学や休学が増えると予想していることが明らかになっている。

## (3) 本学における遠隔授業の方法について

本学(関東地区)においては、前期はほとんどオンラインで実施、後期前半は対面授業を取り入れ、後期後半は一部オンラインに切り替え実施した。本学は、3年制の短期大学であるため、縦割りグループによる少人数制のクラス形式を導入している。さらに、クラスコーディネーターと呼ばれる教員による学習ナビゲーションを行っているため、本学が独自に取り入れていたユニバーサルパスポートを利用して各種情報の共有を図ることで初年次の学生の退学防止に貢献できたと推察する(1年生の退学者は0人)。

このように学生らが安全な環境で授業を受けることが出来るようになるまでの一時的な対策法として導入した遠隔授業は、初年次生にとっては皆無なことばかりであった。大学教務課が郵送した「遠隔授業に関する資料」を熟読してオンライン授業を受講する体制を各家庭で準備する必要性があった。しかし、パソコンの購入ができない学生や単身で上京している学生にとってかなり負担になることが予想された。そこ

で、ほとんどの学生が所有する携帯電話の機能を有効活用する方法を大学全体で模索した。前期は、YouTube 動画の URL をアップし、事前の講義資料の配布やパワーポイントによる録音、zoom などの活用でオンライン授業を行った。それぞれの授業担当者が模索しながら少しでも質の高い授業を目ざした。

中でも、演習科目、特に音楽や表現系の授業においては、直接的なやりとりで習得する内容が主であるため、上記の手法で相互に満足のいく授業の展開には限界があった。そこで、「反転授業」の発想を部分的に取り入れることで、学生らが次の授業に期待を持ったり、他の学生の意見を共有出来たりすることをねらって授業を構築した。

## (4) 反転授業の効果について

重田(2014)は、反転授業の効果について3つの利点を挙げている。学生に授業に先立ちビデオ教材の視聴を課すことは、①授業時間外の学習を促し大学単位の認定に求められる授業外の学習時間を確保する効果があると述べている。第2の利点は、②学んだ知識を使う機会を増やす効果、すなわち、これまでは主に知識のインプットの場合であった授業時間をアウトプットの活動に多く割くことができるようになる」と説明している。そして③学習の進度を早める効果もあると述べている。

## 2. 本研究対象の授業内容について

### (1) 授業の概要

**授業名:** 保育教材研究「うたと手遊び」

**授業形態:** 演習科目 必修 1単位

**授業の時期:** 令和2年4月～8月

**授業のねらい:** 子どもとの関わりを豊かにするための手遊びやわらべうたなどの演習を通して現場実習における技能を高める。

**到達目標と学習成果：**

①保育の内容に即した手遊びやわらべうたの技能を身に付けることができる。

②美しい声の出し方、発声の基礎を学び、手遊び、わらべうたに反映させることができる。

**授業の担当者及び内容：**

橘：保育の現場における手遊び・わらべうたの実践について

松田：発声・呼吸法・美しい声の出し方（清潔な声）・声楽の専門的スキル

**(2) 授業の特徴**

わらべうたなどの指導においては、声楽的なレッスンのみではなく、将来乳幼児と向き合うことになる学生らに自ら表現することの楽しさを感じてもらうことを念頭に置いている。学生ひとり一人の五感が刺激されるような体験を繰り返し行っている。4月に入学したばかりの学生らの緊張をほぐすところから始まり、保育現場におけるわらべうたや手遊びなどの習得と実践、グループワークによる活動、振り返りといった流れですすめている。

**(2) 2020年度の遠隔授業について**

令和2年度においては、急な変更であったが、様々な遠隔の手法を取り入れることでライブに近い感覚での演習形式を目指した。YouTube 動画によるオンデマンド、zoom を活用した同時双方向型、ユニバーサルパスポートを活用した課題提示であった。ズームと対面授業のハイブリッド形式では、わらべうた・ふれあいあそびを重視した。また、前半に動画視聴などで課題提示をしながらすすめていたため、後半の zoom 授業や対面授業において反転授業のような形態に近づいた。自宅では、YouTube 動画で学び授業に先立って知識の習得を済ませ、対面では講義に加えて学んだ知識の確認や質疑応答、ディスカッションなども行った。学んだ手遊び・わらべうたを実際に「使うことで学ぶ」場面も見られた。初年次学生なので教室内では意見が言えな

い学生も、課題レポートにおいては知識の習得と主体的な学びの確認ができる質の高い内容が目立った。

**3. 研究の目的および実施方法****(1) 研究の目的**

この遠隔授業の取り組みから、これまでの対面授業では全く意識していなかった盲点なども発見し、遠隔であろうが対面であろうが学生の学習効果を一番に考えて授業を組み立てていく必要性を感じた。音楽表現系の遠隔授業の構築は初めてであり、発信者と受信者相互の手探りの中で進めていくしかなかった。しかし顔も見えない初年次学生とのメールのやりとりの際に、こちらの発信を「待っている」ということが十分に伝わってきた。特に前期は、先に述べたクラスコーディネーターが出す定期的な確認メールへの学生の返信内容（もっと知りたい・学びたいなどの意見や要望など）から「学びを欲する姿勢」が伺えた。

そこで、音楽表現系演習科目の学習効果を高めるうえで、①「教育の質」と②「学生の意欲」③「知識の定着」に着目したいと考えた。

よって、本研究の目的は「音楽表現系の遠隔授業」が、学生らの学びにどのような影響を及ぼしたかについて、実践に基づいた結果から上記3つの着眼点を軸に整理することであった。

**(2) 研究の方法**

<対象者および調査時期>

**対象科目：**保育教材研究「うたと手遊び」

**対象者：**保育教材研究「うたと手遊び」2020年度受講者 75名

**調査時期：**2020年4月～2020年8月

**調査方法：**上記科目の振り返りシート自由記述を全て回収し整理、分析した。

**分析方法：**自由記述の分析(出村, 2007)においては、1つの内容を1記述とし、カード化、グループ化し、読み取り(解釈)と総合化(出村, 2007)

の作業を行った。その意味内容から、  
 ①「教育の質」に関する内容  
 ②「学生の意欲」に関する内容  
 ③「知識の定着」に関する内容  
 の3つの内容に分類し、カテゴリー、サブカテゴリーを抽出した。読み取り（解釈）および分類に際しては共著者と協議し、信頼性・妥当性を確保した。  
**倫理的配慮**：授業開始時に、学生らに授業のアンケートや自由記述・写真・映像などを論文で使用する事をあらかじめ伝え、確認と承認を

得た。

#### 4. 結果

3つの分類による学生の自由記述の結果は表1.2.3のとおりである。  
 主な記述内容に、授業形態（動画：D, zoom：Z, パワポ：P, 対面：T）を記載した。  
 以下文中において、カテゴリーは【 】サブカテゴリーは< >主な内容は「 」斜体で示す。

表 1

1. 「教育の質」に関係すると考えられる自由記述内容				
カテゴリー	サブカテゴリー	主な記述内容（動画配信：D, zoom配信：Z パワポ：P 対面：T）		
教育の質	理解度(36)	授業内容(25)	・説明が判りやすい (D,P) ・保育現場などの事例に基づいた話が面白い (D) ・うたと手遊びの授業で清潔な声について知り、考えることが出来た(D) ・他者の自由記述の紹介を毎回してくれるので他者の意見も知った (D,P) ・子どもの認知とわらべうたの関係を理解した ・授業最後の「なぞなぞ」と「さよならあんころもち」が魅力(D,P,Z,T)	
		授業方法(11)	・わらべうたの前の顔と声のストレッチが効果的(D,Z) (7) ・資料（パワポ）が判りやすい (D,P)	
	学びの共有(19)	共感(7)	・音楽的視点・保育的視点どちらの講義も共感できた (D,P,Z) ・自分と同じ考えの人がいて共感できた(D,P)	
		共有(5)	・チャットで他者の意見が見える・聞ける (Z) ・ズームでの歌と手遊び実践で他者の声が聞こえて、授業を共有している感じがした(Z) ・自宅で1人で動画を観たり課題に取り組む中、ズームでのうたと手遊びで心が軽くなり一人じゃないと実感した。(Z)	
		★自宅学習(13)	・妹と自宅で楽しんでいる。(D) ・自宅で母と一緒に受けている。 ・自宅での学びはリラックスできる・周りを気にしなくてよい（マインドフルネス） ・大学で友人と出来なくても自宅で家族とやってみて相手の顔を見ながら行うのは、楽しくて嬉しい気持ちになったと思った。(D,Z)	
		子ども理解(9)	子ども理解(9)	・子どものコミュニケーション能力の発達、大人との関係が関わっていることについて理解した (D) ・動画を観て、乳児が親しみを感じている人の声の暖かさや表情しぐさに触れる事の大切さを理解した(D) ・子どもの心が育つとコミュニケーション力も育つことを理解した(D)
			領域：表現の理解(20)	・わらべうたは音域が狭いので子どもや男性も歌いやすいと思った(D) ・わらべうたは自分の声と身体があれば楽しめることを体得した (D,Z,T) ・うた、わらべうた、手遊びの意義、その必要性がよくわかった(D,P) ・わらべうたの経験がのちのおにごっこやかくれんぼなどの集団遊びにつながることを理解した ・発声法的重要性について学ぶことが出来理解した ・わらべうたのような遊びは、子どもの心に「豊かさ」や「弾み」を与えている
	専門性(40)	職業理解(8)	・授業を通して乳幼児教育に携わる現場の先生方の思いを感じた ・将来保育士の立場になったら、学んだわらべうたを遊びとして伝えるだけではなく子どもの成長に寄り添いながら大切なことを伝えていきたい ・現場の先生が子ども目線で一緒にわらべうたを楽しんでいることを理解した ・保育者は、心の育ちと対話する保育を心掛けていることを理解した	
		想像力(3)	・最後のなぞなぞあそびから、保育現場の子どもの様子をイメージできた ・子どもの頃、母のわらべうたに落ち着く感じがした理由として、人の声の温かさを感じていたのでは？	

表 2

2. 「学生の意欲」に関係すると考えられる自由記述内容			
カテゴリー	サブカテゴリー	主な記述内容 (動画配信: D, zoom配信: Z パワポ: P 対面: T)	
学生の意欲	モチベーション (70)	自信(8)	・声のストレッチ体験のおかげで自信を持って声が出せるようになってきた(Z) ・自分自身が楽しむことでモチベーションアップ(D,Z)
		関心/動機づけ(17)	・次の対面授業で笑顔を忘れずにわらべうたを楽しみたい(Z) ・子どもたちを引き付けるくらい上達したいと思った ・わらべうたや手遊びについて多くの知識を身に付けたい(D,Z) ・「保育」や「うたと遊び」への関心がさらに強くなった(D,Z)
			期待(45)
	主体性(11)	主体的な学び(2)	・幼いころによく遊んでいたが、一度は耳にしたことのある歌がわらべうただと知って感動し、さらに自分なりに調べてみた(D)
		実行力・決意(9)	・回を重ねるたびに仲良くなった友達とzoomで個別に連絡を取り指導案などの取り組みで相談し合った (Z) ・顔のストレッチは初体験であったが、表情が豊かになるので毎日やりたいと思う(D,Z) ・この授業で学んだ知識を実習などで是非やってみたいと思った(D,Z,T) ・子どもに対して一つでも多くのことに気づきながらわらべうたを取り入れられる保育士になりたい
	気づき(18)	講義による気づき(9)	・わらべうた遊びが私たちの心の豊かさの原点なのだと気づかされた(D) ・この授業での学びは教育者としての本質的な学びだと気づかされた(D) ・コロナの影響で家に閉じこもりがちな家庭の状況を、より親密な親子関係が持てるというプラスな思考に変えて親子関係をより良いものに出来たらいいなと思った(D)
		演習による気づき(9)	・わらべうたは特別な資格や経験も楽器もなしで声のみで子どもらの五感を刺激する素晴らしい遊びだと気づいた ・声のストレッチでは、*1声の振動が節々に伝わったことを感じた (D) ・動画をとおしてのじゃんけん遊びでも臨場感はある (D) ・胸を張り起立して行うことで自然と笑顔になった(T,Z) ・わらべうたのテンポはゆったりしていて一定のリズムだから心にも体にもしみる(T,Z)

表 3

3. 「知識の定着」に関係すると考えられる自由記述内容		
カテゴリー	サブカテゴリー	主な記述内容 (動画配信: D, zoom配信: Z パワポ: P 対面: T)
知識の定着	繰り返しによる定着((24))	・繰り返しの発声練習でやり方・順番を覚えた(D,Z,T) ・手を口に当ててあくびをするだけで軟口蓋が弾きあがることを知り、繰り返しやっている (D) ・動画なので何回も再生して繰り返し視聴できるため覚えることが出来る(D) ・わらべうたは耳に残りやすいメロディーになっているので数回聴いただけで覚えられる(D,Z)
		反転授業による定着(18)
	認知・記憶による定着(13)	・気になった言葉や専門用語をもう一度確認できる (D,T) ・部分指導案作成の際何回も動画とパワーポイントで確認し書きかたを覚えた (D,P) ・パワポの画面が見やすく、記憶に残りやすい (D,P)

(1) 「教育の質」に関する内容

「教育の質」に関する内容として【理解度】  
【学びの共有】【専門性】の3つのカテゴリーと  
9つのサブカテゴリーが抽出された。

1) 【理解度】: 学生が<授業内容>およびその<

授業方法>において「理解した」「わかりやすい」

「効果的である」と記述評価したことなどから  
命名した。

2) 【学びの共有】: 動画視聴から zoom・対面への  
反転授業で「共有できた」「共感した」ことに加

えく★自宅学習>での「家族と一緒に聴講」などから命名した。

3) 【専門性】: 授業内容における「専門性」の「体得」「理解」「発声法の重要性」記述による<領域: 表現の理解>、「子どものコミュニケーション能力」記述による<子ども理解>、「現場の先生方の思い」「保育士の立場」「子ども目線」記述による<職業理解>、「子どもの様子をイメージ」による<想像力>などの記述から【専門性】への意識の表れと解釈し命名した。

## (2) 「学生の意欲」に関する内容

「学生の意欲」に関する内容として【モチベーション】【主体性】【気づき】の3つのカテゴリーと7つのサブカテゴリーが抽出された。

### 1) 【モチベーション】

「声のストレッチで自信」「自分自身が楽しむことでモチベーションアップ」記述で<自信>、「楽しみたい」「上達したい」「うたと手遊びへの関心がさらに強くなった」記述で<関心/動機づけ>、「毎回のなぞなぞへの期待」「早くみんなと対面授業で実践したい」による<期待>などの記述から【モチベーション】と命名した。

### 2) 【主体性】

「自分なりに調べてみた」「顔のストレッチは毎日やりたい」「実習などで是非やってみたい」「～な保育士になりたい」などの記述から<主体的な学び><実行力・決意>のサブカテゴリーを総じて【主体性】と命名した。

### 3) 【気づき】

「教育者としての本質的な学びだと気づかされた」「わらべうたは心の豊かさの原点と気づかされた」といった<講義による気づき>、「声の振動が節々にいきわたることを感じる」「動画でも臨場感がある」といった<演習による気づき>などの記述から【気づき】と命名した。

## (3) 【知識の定着】に関する内容

「知識の定着」に関する内容として【くりかえしによる定着】【反転授業による定着】【認知・記憶による定着】の3つのカテゴリーが抽出された。「繰り返しの発声練習」「繰り返し視聴できる」「わらべうたは耳に残りやすいメロディー」などから【繰り返しによる定着】「先に動画で知識を貰っていたので zoom でも対面でも予測しながら動けた。「動画による一方向での知識の獲得が、対面でその遊びを活用・アレンジした」などの記述から【反転授業による定着】とした。「パワポの画面が見やすく、記憶に残りやすい」「気になった言葉や専門用語をもう一度確認できる」などから【認知・記憶】と命名した。

## 5. 考察

第1回目はYouTube動画でテーブル童話を筆者らで演じて見せた。2回目以降は、パワポを使った講義といくつかの手遊びやわらべうたの紹介をし、毎回課題を提示した。対面授業のような楽しい雰囲気での実践的なやりとりはなかったが、入学しても大学で学ぶことが出来ない学生にとって、うたや手遊びを自宅で一人または家族でやってみる★ことで得られる効果もあったようである【学びの共有】。また、動画の繰り返し視聴で何回も学び、真似ることが出来て、結果として「知識の定着」に貢献していたと推察される【理解度】。

Zoomによる双方向授業ではチャット、グループセッションなどの機能があるためとても便利であった。顔が見えるという点では、初めて教員と学生らがひとつになることが出来、心理的なプラス面もあった。初回は zoom にうまく入れない学生も居たが、慣れてくるうちにチャットでの質問や、反転授業としての効果もあったようである。特に学生ポータルサイトを利用した「部分指導案作成」においては、zoom および動画での学びをもとにすすめることが出来た。一つの手法ではなく教える側の意図やねらいに

よって手法を代え、組み合わせていくことで「学びの効果」につながったと考える。対面授業では取り入れられなかった「部分指導案作成」まで実施できたことは、遠隔授業であっても「教育の質を下げることはなかったといえるのではないだろうか【認知・記憶】。

感染防止のため、対面授業ではうたを歌えないといった難点もあったが、声楽講師による「リズムうちを取り入れる工夫」や「エアーで表現などの工夫」により、効果的な表現方法も取り入れることが出来た。

特に今回は子守歌に関する講義と実践を取り入れたことが学生にとってとても新鮮で懐かしい体験になったようである。コロナ禍において子守歌を歌うことがどれだけ情緒の安定と結びつくのか。学生が身をもって感じたことが自由記述からうかがえた。うたの導入部分である体のストレッチ、呼吸法などはコロナ禍において授業の中で継続的に取り入れることで、学生らの精神の安定につながることもわかった。また対面ではなく自宅で声を出す、発声練習をおこなうということは情動の発散へと結びつく大切な要素であることが自由記述より明らかとなった【自信】【気づき】【繰り返しによる定着】。

音楽表現系演習科目の保育教材研究（うたと手遊び）の授業において、今までは体を動かしたり、声を出したりすることを流れの中で多く取り入れていたが、遠隔の授業においてはパワーポイントを使い、1つ1つの意味を十分に説明できたことで理解度が深まったように感じる【理解度】。

その反面、遠隔の授業では大人数の中で声を出すという機会がなく、自分一人だけで声を出しているため、再開した対面授業の際は一人で歌おうとしても急には音量アップできず、不十分な声であることも判明した。コロナ前の対面授業では、大きな筋肉を動かしながら他と協調

して繰り返し声を出すことで、一人一人の個人の歌唱スキルアップへとつながっていたことが明らかとなった。よって、声楽的観点ではこれまでの対面授業での効果に近づけることは難しかった。

Zoomの授業では声を同時に出すことができないため、範唱した後にフレーズごとによって歌う。もしくは範唱したあとに1曲歌う時間を作るという工夫も行った。手遊びなどはzoomでは少しずれても気にならないということが分かった。ピアノ伴奏に合わせて歌うことはズレが気になるが、うたと手遊びの授業では、声のみでの授業であるため、音程やリズムを自由に変われるという利点がある。歌っているときの表情も画面越しだとはっきりとわかる。Zoomならではの効果であると感じた。更に、ミュート機能をうまく利用して2グループ半分ずつミュートを外して歌うことでハウリングの防止にもなった。

YouTube動画に組み込んだパワーポイントの講義では、携帯を使用して授業を受けている学生が多いため、画面に向かって声を出す、また教員側も受けている立場になってどうしたら対面授業に近くなるか、どのようにライブ感を感じてもらおうかということを中心にしながら改良を重ねていった。映像として残るということもあり、何回も重ねていくうちに相手はこちらのほうが聞きやすいのではないだろうかと簡潔にしたり、必要なことを伝えたりするための工夫も生まれ、総合的かつ客観的な視点で授業構成を行った。これらは複数担当で行うメリットとも考えられる。

これらの結果（考察）から、さらに以下3点について推察した。

- ①動画配信型の繰り返し視聴で理解度が上がる。（図.1参照）

2020年度 保育教材研究「うたと手遊び」授業内容（動画再生数）				
回数	授業形態	動画再生数	自実施時期	授業内容
1回	YOUTUBE動画	729	4月	オリエンテーションをかねたテーブル童話
2回	YOUTUBE動画	297	5月	保育の中のわらべうたの意義と役割について
3回	YOUTUBE動画	206	5月	歌ってみようわらべうた（乳児編）
4回	YOUTUBE動画	222	5月	歌ってみようわらべうた（幼児編）
5回	YOUTUBE動画	171	6月	実践手遊び・ふれあい遊び 保育におけるわらべうたとその本質
6回	zoom		6月	実践手遊び（保育活動と手遊びの関係）
7回	対面		7月	実践手遊び（季節・行事・時間・場面をとらえた手遊び）
8回	対面		7月	子育て文化が詰め込まれたわらべうたの特徴
9回	対面		7月	二人組・集団でできるわらべうた
10回	zoom		7月	親子で楽しめるふれあいわらべうた
11回	YOUTUBE動画	147	8月	わらべうたについてもっと深く知ろう（子守歌）
12回	YOUTUBE動画	153	8月	保育計画ってなあに？わらべうた遊びを事例に考える
13回	対面・課題		8月	保育指導案作成
14回	課題		8月	手遊びブック製作・提出
15回	課題		9月	振り返り
		1925		

図. 1 2020年度 保育教材研究「うたと手遊び」授業内容（動画再生数）最終確認日 R.3.02.16

学生の感想などから繰り返しの視聴があきらかとなった。初回授業再生数は、729 とかなり高い。75名の学生一人当たり9～10回近く視聴したことになる（本学のみで配信：一般公開なし）。本格的なディベートはできなかったものの、必ず問題提起をしていくことで、レポートの内容は深まっていったと推察する。また、指導案作成においても繰り返し視聴により、書きかたのポイントを何度も見て覚えたという記述が多かった。【知識の定着】。

②zoomなどのWeb会議システムの活用効果は高い。

ライブ感覚で他者との交流が図れることで一方の動画配信とは違った効果が学生記述からも明らかとなっている。歌うということに関し

ては声を同時に出せないというデメリットもあった。しかし、回を追うごとの工夫やアイデアで、対面授業とは異なった効果なども確認できた。よって zoom の活用効果はあったと推察する。

③対面授業とオンラインの融合で教育の質が高まる。

「反転授業」という視点では、対面授業とオンラインの融合で教育の質が高まったと考えられる。自宅では、YouTube 動画で学び、授業に先立って知識の習得を済ませ、対面では講義に加えて学んだ知識の確認や質疑応答、ディスカッションなどを行い、学んだ手遊び・わらべうたを実際に「使うことで学ぶ」場面も見られたことから効果はあったと推測する。



## 6. 総括および今後の課題

本研究の目的は「音楽表現系の遠隔授業」が、学生らの学びにどのような影響を及ぼしたかについて、実践に基づいた結果から3つの着眼点を軸に整理することであった。加えて大学における遠隔授業の在り方を模索することでもあった。

学習効果を可視化するうえで、「教育の質」と「学生の意欲」、「知識の定着」がキーワードであると考え、実践に基づいた結果をもとに、学生の自由記述および実施者間により検討・考察を行った。結果、①反転授業の効果、②zoomの活用、③対面授業とオンラインの融合が効果的であることが推察された。また、今後の対面授業の見直しへの貢献につながったと考える。

今回の取り組みを通して、我々は保育者養成校における「音楽・表現教育」のあり方を改めて考えるきっかけになったと実感している。保育の現場に必要なことは何か、またなぜ音楽を学ぶ必要があるのか、など学生の主体性を育むためにも一方通行の授業ではなく、教える側と学ぶ側とのやり取りの中で相互の学びが深まるように工夫した。現場での理論に加え、子どもの発達や異年齢の子どもを想定し、知識および技術の習得のみに捉われず、「今ここを生きる」子どもらと将来向き合うための表現力であったり感性磨きであったりを感じて欲しいと繰り返し伝えた。

声楽的な観点としては、学生らが自宅において一人で声を出しているため声を出しにくいというデメリットもあったが、4月からの動画配信により、いつもの何倍も教員は歌う機会が増え何倍も学生は繰り返し動画を見ていたことが明らかとなっている。対面授業における演習はその場限りで終わってしまうが、オンデマンドの特徴が生かされた結果ではないだろうか。コロナ禍において、学生らは大学に行けない、また友達とのつながりが薄い中でたくさんの不安

もあっただろう。しかし、この授業を通して「音を楽しむ心」や「音楽のもつ力」に触れ、ストレッチによる心と体ほぐしで情動の発散を行ったり、うたや手遊びを家族と行ったりできたことは、この授業の本質的な部分が可視化され、音楽表現系演習科目の新しいエビデンスになりうるのではないだろうか。

本研究では、実践結果と学生の自由記述のカテゴリー化をもとに推察、検討したが、今後は自由記述の精査と統計的な検討も必要である。また、年度によって学生の人数や特徴も異なるので、対面授業であっても遠隔授業であっても「教育の質」を追求していく姿勢でありたいと思う。

### 利益相反

本研究による利益相反は存在しない

### 著者資格

KTは、研究の着想から原稿作成の全プロセスに貢献した。FTは、声楽的観点における考察および論文全体の完成度について貢献し、最終原稿を読み、了承した。

### <引用・参考文献>

重田勝介(2014)反転授業—ICTによる教育改革の進展—情報管理, vol. 56, no. 10, 677-684.

文部科学省(2020)新型コロナウイルス感染症に係る影響を受けた学生等に対する追加を含む経済的な支援及び学びの継続への取組に関する留意点について(依頼アンケート)

文部科学省(2020)大学等における後期等の授業の実施方針等に関する調査結果(地域別)

尾原昭夫(2009)『日本子守唄選集上巻北海道・東北・関東・北陸甲信』郷土文化協会

後藤正幸, 酒井哲也, 伊藤潤, 石田 崇, 平澤茂一, “選択式・記述式アンケートからの知識発見”, 武蔵工業大学紀要, pp43-46

出村慎一, 山下秋二, 佐藤 進 (2014) 健康スポーツ科学のための調査研究方法”, 杏林書院, pp, 136-137

出村慎一 (2007) 健康・スポーツ科学のための研究方法 研究計画の立て方とデータ処理方法”, 第1版, PP73, 杏林書院

酒井隆 (2007) アンケート調査と統計解析がわかる本, MAMpp, 104-105

橘和代 (2018) 「保育・教育実習において学生が自己評価する表現実技における羞恥心の実態」『有明教育芸術短期大学紀要第 vol. 10. 31-42.

橘・松田 (2020) 保育者養成における表現指導のあり方を考える—初年次教育の観点から—日本音楽教育メディア学会第 vo. 16. 12-13.

松田・橘 (2020) 保育者養成におけるわらべうたの実践 有明教育芸術短期大学子ども教育実践総合センター 子ども教育実践研 vol. 3. 49-54.

コダーイ芸術教育研究所 (2008) 『いっしょにあそぼうわらべうた』

NPO 法人東京都公立保育園研究会 (2018) 『子どもに人気のふれあいあそび』 ひとなる書房